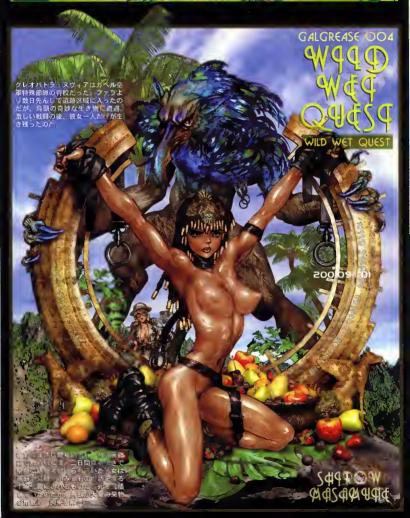


「果养法」によると、「不死の秘法」を受ける者は「石棺に入る」と记してあったが、実際には「周囲に石棺が形成されていく」ようだ。クレオパトラ・ヌヴィアと緑色のヘビは交わったまま徐々に見えにくくなっている。やがて石棺となり具頭建にどこかへ遷ばれて保存されるのだろう。何とか鳥頭の一匹、ヘビ又は液体底いは彼女を研究塾に持ち帰りたいが、状況を考えると本格的調査鍵を要請できる証拠サンプルの入手が精一杯だろうか。何よりも、この地域をしてガベル共和国から無事に閉出せればならない。クレオパトラの石棺が運ばれると予想されるビラミッド(なぜかざからに輝いて見える)にた回りし、何か手を打ったほうが良さそうだ。それにしても衛星通信の時代にこれほど非科学的な事態に直面するとは・・・・

TO BE CONTINUE

## WILD WET QUEST







からか分泌している大量の液体も吐き出したいか、やむをえず飲み込んでいる。この液体は様れるような感覚があり、麻薬や幻覚性 ろうが馬頭であろうか「時間の神」や「実界の神」に太刀打ちてきない苦だ。ファラは辞垣を離れて(まさか実践する事になるとは アルカロイドの一種なのか、やがて意識が異常な鮮明さを持って現実と非現実の境界をさまよい、内臓のあちこちも激しく理学し始 夢にも思わずに)習い覚えた古代の儀式を行う場所を採し始めた。銃弾やナイブ、脳やシャヘル、眼鏡に到るまで持っているものは めた、甘媚な刺激に支配されて身体をよじりながら、第二、第三のヘヒが別の入り口を求めて這い上がって来るのに応し、彼女は履 全て儀式の対象だ。非科学的アイテムの準備が出来次第クレオバトラ・ヌウィアを殺して科頭達と戦うか、「不死の秘法」か危険か を落とし気味にしてそれらを受け入れる体勢た ファラはクレオバトラ・ヌウィアの全身の格膜からヘヒの分泌液体が浸透し、然 どうか彼女で確認してから戦うか、選択肢はあまり無さそうだ。

へどを吐き出そうとすると可頭達が慌てて制止する上、動くとヘビがキハを立てそうなのでうかつに動けない。口の中のヘヒかどこ はならない。通常の武器だとガベル共和国軍の強力な火器であっても効果は期待できないが、「不死の秘法」を行うものは人間であ



